

連載第六回 25 ~ 30 (完)

抄訳 井手淑子

《第24回までのあらすじ》

主人公の林家宝（幼名は小宝）は、南京に生まれ、日中戦争が始まった1937年には小学校4年生。日本軍は少年の心を傷つけ、日本鬼子に対する怒りと祖国への熱い想いを抱かせた。

抗日戦争の初期、多くの人々は蒋介石を支持し、国民党への信頼を寄せたが、戦争の長期化と共に、共産党および紅軍への期待と解放区、新四軍への参加も拡がつて行った。

小宝は姉やその友人たちとの交流の中から、ロシア革命、フランス革命、第1次大戦をはじめ、「コーリキー」、巴金、エドガース・ノーノーなど多くの作品を通して社会を知り、自分の将来を中国の将来と結び付けて考えていった。それは科学的社会主义や中国共産党へとつながる道でもあった。

1945年、日本が降伏し、人々は待ち望んだ平和の訪れを期待した。しかし、蒋介石はあくまでも共産党の撲滅を重視し、内戦が始まつた。裏切られた人々は、老蔣への信頼を失くしていった。戦後の厳しい生活中でも「反飢餓・反内戦」の激しい運動が各大学、地域でおこり、大きな大河への確実な流れとなつていった。

林家宝は上海の復旦大学に入学。歴史と民主的な伝統のある新聞学科の門をくぐつた。

*この連載は、ホームページ「時事評論士シヤツ」欄でご覧いただけます。

三輪車を雇つて復旦大学に着いた林家宝（小宝）は正門の大きな8文字『學術獨立・思想自由』を目に見て、新聞学科での受付をすませ、学科主任の陳望道先生にも会えた。教授は浙江なまりの普通話で、にじにじして、なぜ新聞学科に学ぶのかを訊ね、林家宝は『もともとは理工科で科学による救国を考えていました。でも現在の中国では、科学が国を救うのは、もっと先の理想だと思います。今最も必要なのは、広大な人民を自覚めさせることです。だから一新聞記者となり、わが国および世界のこととを事実に即して多くの人民に報道する、これが重要な仕事だと思いました。』と答えた。

男子学生の宿舍は、2カ所、かつ

ての日本軍兵舎であった。

一部屋に上下のベッドが5つ、10人に椅子のない一つの長い机があるのみの、全く粗末なものだった。

学生会が各新入生につけたお世話役の上級生は、教科の選択や、食堂での食券買い、最初の食事にも付き合ってくれた。栄えある《復旦人》になつたことが嬉しく、最初からこの著名な大学を好きになつた。

上級生が学内を案内中に、「復旦大学学生自治会」の看板を見つけた。しかし《5・20》後、学校側が大量の学生を除籍し、自治会も閉鎖されたとのこと。林家宝が自分もこのデモに最前列で参加したと話すと、進歩的學生だと知った上級生は、復旦大学には革命的伝統があり、学生運動が強いので、国民党や三青団との鬭争も激しく、犠牲になつた一部

の學生は、解放区に行き、李先念の部隊に参加して行つたこと、新聞学科は復旦の進歩勢力が最も強く、復旦の《解放区》と呼ばれていると話した。それを聽きながら、林家宝は、そんな学科に入れて幸せだと、つづくべき思った。

林家宝は、上級生のサークルに入るのでなく、自分たちでサークルをつくりたいと、友人と相談した。然だとすぐ賛成したが、別の人一人は、『サークルをつくるって何をする?』と、否定的だ

学校は許可するの?』と、左翼の学生と「一線を画せ」という校長の教えが刻まれていた。サークルの結成は認められていたが、林家宝は、焦らず、高すぎる目標を求めず、みんながや

りたい活動を繰り広げることの大
切さを実感した。

か？疑問だった。

1947年10月、浙江大学生

自治会主席が国民党政府に逮捕され、獄中で殺されたとのニュースは、多くの学生の怒りを巻き起こした。ひつそうとしていた復旦大でも、地下党の呼びかけで、一日ストを決行、参加した学生は300人以上となつた。国民党特務ら十数人が猛スピードで大字報を破り捨てた。

26 中国の未来はどうしよ。

多くの学生は新聞記者としての経済的な安定を求め、地主の息子などは、思想的には正統派＝国民党と蒋介石を信奉し、孫中山の三民主義にもどづく富国強大な国家を望んだ。

しかし、この1年の情勢に幻惑つ者もいた。国民党軍はアメリカ式の装備、飛行機もタンクも大砲もあるのに、なぜ共産党をやつつけられず、人民はなぜ共産党を支持するの

か？疑問だった。

クラスの女子学生は、教室の窓からツバを吐いたとの理由で、全ての濡れぎぬだった。クリスチャンの彼女は、このファッショ的な行為に対し、左の頬までも差し出せないと冷静に考へ、以後積極的に学び、発言した。字も上手で、大字報に顔真卿流の字を書き、右派学生から『この大字報の中身は悪いが、この字は本当

に美しい』と言われた。

NEWSの社のある日の討論会は『我々の国家の将来』と題し、二人が話した。林家宝の友人、韓大平は『八年の抗日戦争からようやく勝利し独立を勝ち取った。老蒋は、過去の教訓に学び、全国の各党派、団体を団結させ、協力して我が国を建設すると思つていた。内戦で人民を安心して生活できない日に遭わせるなど思つてもみなかつた。僕は我が国の前途はこの戦争で決まると思う。もし正義の方が勝利するなら、中国は新しい民主主義社会歩むだろつ。』と述べた。

もう一人のコン源根は、『抗日戦争の勝利後、蔣委員長の下に一致協力すると思つていた。内戦の勃発と拡大は国共双方に責任があり、双方が改めて話し合ひのテーブルに着

かにかかっている。また孫中山先生の三民主義に従つて建設していくべきで、共産党が言う新民主主義とかをやるべきでない。漸進的、温和平な方法で我が国を進歩させる。僕は革命ではなく改良を主張する。』と述べた。

一種類の完全に異なる視点は、激しい議論を呼び、様々な思想の流れが大河の如く、大学生に迫つた。

彼自身も考へた。林家宝たちのような純真で愛国的な青年、戦争好きではない彼らが、こんなに過激になり、なぜ老蒋に失望しているのか?

一杯食べられない労働者とその家族、三輪車引き、露天商、行き倒れ、失業者、戦乱を逃れてきた人たち、路上の乞食たち。毎日の「道に凍死者」の一ニュース。1947年、最も寒い夜、一晩に500人以上が凍死した。国民党政府はこの年も救援活動を呼びかけたが、三青団の仲間は『我々がそんなことをやる必要はない。上にお金を出せりゃればいい。』と笑った。しかし学校側は三青団に多額の活動費を与え、大きなトラックも用意した。ラシャや毛皮のコートにハイヒールの学生たちは、出かけてすぐに逃げだしたが、学校側はすでに彼らに《募金》を用意していた。

一方、中国共産党地下組織は、この公然の機会に学生たちに救援活動を呼びかけ、1000人ほどが参

加した。住民たちは、学生がやるなら『安心だ。国民党政府のポケットに入ることはない。』と、家から現金や衣類、布団を持ってきた。むしろフランス租界の洋館にも宣伝しが多いことを体験した。十日間で5万着以上の防寒着と8000万元を渡しに行つたスラムの、草屋根と木のバラック小屋からは、溝の臭いが鼻をついた。ベッドに横たわる病気の老人。骨と皮ばかりの子供・・・その帰り道から議論が始まった。

『上海で生まれ育つたが、スラムへ行つたことはなく、知らなかつた。』『僕たちは甘肃出身で、貧しく遅れているが、外灘のある美しい上海に、こんなに貧困にあえぐ

人々が、全国でせざるなり多いだろうか?』『なぜ中国はこんなに貧しいのか、どうして原因があるのか?』

んな意義があつつか?と考へた。

『これは全ての社会問題だ。中国は共和国ではあるが、半封建的、半植民地だ。帝国主義と封建主義に加え、官僚資本主義が、頭上を抑えつける

28 立ちのけぬ煙

『三つの大きな山』となつてゐる。林家宝はこの現実から「階級的視点」を学んだ。この古い社会をひっくり返し、徹底的革命を一と思つた。

教育部（文部省）は、復旦大学学長への秘密の電報で、左翼分子たちの活動と認め、主要人物を掲げ、調査を命じた。その結果、学校側は17人の成績を全て50・0点と不合格にした。しかし、学生たちは一笑に付した。彼らは、国民党政府を打倒せず、この旧社会をひっくり返さず、勉強だけいい成績をとつてもど

地下の共産党指導部（上海学連）は、イギリス帝国主義への抗議をいち早く組織し、全市74の大学・中高の代表は、一日ストと行動を決定

した。2万5千人以上の「トモ隊は、黄浦江沿いのイギリス領事館に抗議文を渡し、『イギリス帝国主義に

抗議する!』と叫んだが、南京路に来た頃には『打倒米英帝国主義!』『奴隸外交反対!』『反動政府はつらせ!』と叫び、待機中の軍警ボスが鎮圧しようとしたため、「トモの責任者が解散を命じた。

三青団の責任者は、今回の「トモが

した。

やはり左翼分子に主導権を握られ、しかも自分たちの政府の打倒まで叫ばせ、首をうなだれた。また国民党政府は、進歩的学生の手にあつた国立同濟大自治会を弾圧し、数十人を除籍・処分した。抗議ストと支援の学生たちに、米軍顧問団を含む

た。

長は市全体への影響を恐れ、命令を執行しなかつた。

さうに国民党政府は、電新九工場

のスト中の労働者たちを捕りえ、厳

しい拷問を加えた。同じ頃、上海のダンサーの女性数千人が社会局に

突進し、その場で痛打された。全市の人民の怒りの波に直面した上海市は、やむを得ず、学生たちを釈放

は同濟大の解散を命じたが、上海市は同濟大の解散を命じたが、上海市

復旦大学の地下党は、更に粘り強く、地道な活動を展開し、多くの中間的な学生や三青団員、青年軍人を

も始めた愛国的な勢力を育てるに
とを決意した。春に始まった「反米
扶日」(アメリカ帝国主義による、
日本の軍国主義復活に反対する) 運
動でもそれを貫こうとした。

林家宝はNEWS社での新聞發
行の他、學習や映画鑑賞、讀書会、
時に遠足など幅広い文化活動にも
力を注いだ。演劇や『黃河大合唱』
も100人規模でとうこんだ。

29 夜明け前の暗闇

1948年9月、NEWS社の新
学期最初の討論会のテーマは、『卒
業即失業』であった。卒業生30人
中、一人だけが郷里の小学校教師の
椅子を探せた。学生たちは、自分の
未来を社会全体に結び付けざるを
得なかつた。

情熱家の章チン以教授とはよく
会い、まるで友人のような関係だつ

学科連合会にも派遣された。主に教
職員にかかる仕事で、陳望道、章
チン以の一人の教授を担当した。

陳望道教授は『僕はこの田で中国

人民の解放を見なくては』と微笑み
つつ、『君たち青年は幸福だ。僕は
共産党創立の発起人の一人で、多く
の若い労働者や学生運動指導者に
出会い、その勇敢さに感動した。し
かし、大多数は犠牲となつた。これ
はなぜか?今君たちの鬪いは成功
しつつある。さればつまりは共産党
が成熟したからだ。一千万人の命と
引き換えに、正しい方針は得られた
のだ。』と言つた。19歳の林家宝
は、50歳もの高徳の先生の言葉に、
幸福感でいっぱいになつた。

た。教授は章益學長と何度も話して、彼が国民党の役職を持ち、学生運動を弾圧したので、共産黨の処罰を恐れ、複雑な心境であると分析した。

1-1月下旬、上海の地下党は、大量逮捕の情報を得た。林家宝は蘇州の友人の祖母の家に避難したが、何事もなく、数日で戻った。

しかし、2月の深夜、南京で宋

玉美が自宅で逮捕され、憲兵司令部の監獄に入れられた。鉄の門、鉄の鎖、電気を通した高い鉄条網の壁、そこから伝わる憲兵の巡回の革靴の音、男子房から聞こえるガチャガチャとつづ足枷、手錠の音、看守の特務が誰かをぶつ音、大声で叫ぶ声。

毎日カビの生えた、又は砂混じりの「飯と少しの漬物。少しのお湯。」一画日に一度の風通しの時のみ、牢の入り口が開けられ、各自が便器を提

げて洗いに行く。太陽の光と新鮮な空気が吸える貴重なひとときである。

宋玉美は、小さな穴を通して隣の労働者と話す、興奮づけられた。しかし、1-2月のある夜中、彼は雨花台で生き埋めにされた。『幸い勝利の望みがある。死んでも満足だ。』との言葉を彼女に残して・・・。

情勢の展開は、看守たちの態度も変え、手紙を出してやり、お金を握らさせると、新聞を買つてくれた。

地下党は各種の救援工作をやっていることを獄中の仲間に知らせ、慎重な対応を望んだ。

2月中旬、宋玉美はついに釈放された。母は人民解放軍の血みじみの戦いのお蔭で娘の命は救われたと心から思った。

復旦大学の章益学長は迷った末

の従兄の家に向かった。

に、三書団のボスからの台湾行きチケットを没にした。全學の教職員の前で、共に危機突破工作に頑張ると宣言し、会場のみんなから大歓迎を受けた。

復旦大学の党總支部は、解放に備え「人民保安隊」「人民宣伝隊」「救援隊」などを組織し、積極分子や地下党員などに、いつでも隠れる準備をさせた。

警は、上海の全大学を包围し、352人を逮捕した。復旦では86人となつた。

他方、一群、また一群と、遊撃隊に向かう学生たちに林家宝は『解放後に会おう!』と言いつつも、もしかしたら会えなくなるのではないかといつらかつた。

4月21日、人民解放軍はついに長江を渡り、23日一挙に南京を攻

略した。この日、宿舎に戻りついた林家宝は友人に注意され、隠れ先の従兄の家に向かった。

26日夜、大勢の軍警が復旦大学を取り囲み、27日明け方、各宿舍に突入した。しかし、ブラックリスト上の学生はいざ、適当に捕えて、数を充たした。出動した1万人の軍警は、上海の全大学を包围し、352人を逮捕した。復旦では86人となつた。

さりに国民党政府は、全ての国立大学と一部の私立大学および中高の閉鎖を宣言した。学生たちは混乱に陥つたが、以前からの準備により、ネットワークを回復した。章益学長も学校経費からお金出し、学生たちの食事の手当に援助した。教授会は1000銀元以上を集め、自治会主席の林家宝が緑のコートに礼帽、

眼鏡で変装してある教授宅に行き、直接受け取った。

一方、囚われた86人は、たゞましく、樂観的で、絶えず歌を歌っていた。憲兵たちも、じれりの感動的な歌を習い覚えた。

一日一日と日がたつにつれ、見張りの憲兵は減つていった。学生たちは憲兵に『君たちはまだ老練にどんな命をかけているのか？　自分の

これからのことを考えたりか。』と働きかけた。

訳者あとがき

5月下旬のある日、田が覚めると、立端すら立つていなかった。嬉しくなった学生たちは、このチャンスを逃さず、四方に逃走した。86人が一人も欠けずに自由を獲得した。

5月25日の夜、蘇州河以南の解放が伝えられ、26日早朝の電話で『蘇州河以南も解放された。上海は

完全に解放された！　すぐに陝西北路1200町の上海学連本部に来てくれ！』『わかった、すぐ行く』林家宝は、野生馬の如く、飛びように駆に急いだ。早朝の空はぼーっと細かい雨が降つていた。一人の戻合羽の解放軍兵士が街角に直立てているのが見えた。
両の眼から涙があふれできた。
(完)

5月25日の夜、蘇州河以南の解放が伝えられ、26日早朝の電話で『蘇州河以南も解放された。上海は

る。その最大の理由は、清朝支配下の民衆の極端な貧しさ（文化的、經濟的）に加え、中国がいち早く歐米列強の餌食となり、1840年のアヘン戦争以来の半植民地となつたこと、15年に及ぶ日本の侵略・戦争、それに追い打ちをかけた内戦と、長期にわたる戦争・侵略による疲弊にあふれています。

1911年の辛亥革命で清朝が滅亡し、ヨーロッパ歩きを始めた中国に襲いかかった日本の侵略と戦争が、はかり知れない大きなダメージを与えたと言える。東北地方（かつての滿州）各地に今なお残る日本のホテル、企業、役所、軍等の建物、果ては人体実験もなされた「ア31部隊」本部の建物であり利用されてこののを見ると、中国の当時の貧しさを知らざれば、十数年前に程

極明氏の著作『洪流』を戴き翻訳を始め、2005年にお会いして、ほぼ同じ自分の体験にもどりながら作品だと知り、より多くの日本人に読んで欲しいとの思いを抱いていた。幸い、日中友好協会京都府連左京支部の会報『友誼』に掲載の機会を頂き、大変感謝しています。しかし、原作本文は、4の2ページの中国語で、紙数の制約もあり、思い切った抄訳となりざるを得ず、著者の思いに十分に迫り切れてはいない。また、例えば、当時の北京は北平（ペキン）と呼ばれていたこと、中国の中学校は日本の中学・高校を指すこと、主人公の林家宝は小学校入学が早く、同級生で最も年下である等も言及できなかつた。北伐を成功させた蒋介石は南京政府を開き、国民革命の実行者として、『老葉』の愛称で呼

ばれるほど支持されていたが、抗日戦争の長期化と共に、徐々に信頼を失っていく。民衆が待ち望んだ抗日勝利後の平和は彼自身によつて「内戦」といひて代わられた。多くの若者が悩み、苦しみ、逃れ、戦つた。その莫大な犠牲の上に、現在の中国の発展があることを、中国の若者たちも知つてほしい。お訪ねした時、つづましい住まいの奥から聞こえた、夫人の弾く「インターナショナル」のピアノの音は、獄中の労働者から、処刑直前に教わつて、獄中の彼女が勇気づけられた調べだと翻訳の終わりに知つた。長い間、愛読下さった皆様にお礼申し上げます。